

# 「中国(福建)と長崎」：華僑大学・華文学院における中国語研修について

— 1994～2004年の短期語学研修実践事例から —

松岡純子

## 1. はじめに—中国語語学研修の位置付け (1993/1994-2001/2002-2004入学生まで)

長崎県立大学では、1994年入学生から2001年入学生まで、第一中国語（Ⅰ初級3コマ・Ⅱ中級2コマ、計5コマ10単位必修）・第二中国語（Ⅰ初級2コマ・Ⅱ中級1コマ、計3コマ6単位必修）を履修する学生に、中国語Ⅲ上級（語学研修）という2年生以上での夏季集中プログラムを組んでいた。Ⅰ初級履修済みの学生が、中国の大学で中国語による中国語の授業を2週間余り集中的に受け、授業時間外には宿舎や街で実際に中国語を使う実践練習を行って会話力を高め、滞在先の都市概況説明を聴いた上で各都市を参観して、中国の社会や人々の暮らしへの理解を深めるものであった。通年授業90分×30回分の時間数に相

当する集中授業を受け、最終試験に合格すれば2単位が取得できた（1993年は第一中国語3年生にのみ単位化、1994年より第一・第二中国語の2年生以上に単位化。ただし卒業要件に含まれない自由選択単位として）。2002年入学生から2004年入学生については、第一・第二外国語の区別がなくなり、既習外国語・初習外国語ともに3コマずつが必修となり、2年生以上の中国語Ⅲ上級（語学研修）の単位は、経済学科・国際経済コースの学生のみ卒業要件単位に含まれることになった（他の学科・コースについては、卒業要件に含まれない自由選択単位）。2005年入学生からは行動科目に位置付けられ卒業単位に入れられるようになっている。

筆者は、長崎県立大学との友好交流校である華僑大学・華文学院を、中国語Ⅲ上級（語学研修）



華僑大学（泉州本校）講堂より正門を望む



華僑大学（泉州本校）正門



華文学院北門

の授業実施校として、事前研修・学生引率・現地での実習指導・補習実施にあたってきた。「中国（福建）と長崎」の地域間交流の事例として、華僑大学・華文学院の概況を紹介したうえで、同校での語学研修実施状況について述べてみたい。

## 2. 華僑大学・華文学院について ——沿革と現状

華僑大学は、海外華僑・華人・香港・澳門（マカオ）・台湾の青年子女の大学進学先として、中国国务院僑務弁公室管轄下、1960年福建省泉州市に創設された総合大学である。初代校長は横浜生まれの廖承志（1908—1983、故中日友好協会会長）である。文化大革命期（1966—76）には海外関係が批判的的となり、1966年授業停止、1970年閉鎖。1978年に再建が始まり、1983年には国による重点建設大学に選定された。

現在、泉州市の華僑大学本校に、理学・工学・経済・管理・法学・文学・哲学・史学部門を擁するほかに、廈門市集美区に華文学院、福州市に福建音楽学院を設けている。「一元主導，多元交融」「寛容為本，和而不同」を基本として、中国内外の7万5千人余り（うち海外生3万6千人余り）

の人材養成を行ったという。2005年現在、教職員総数1758人（うち専任教員900余人）、在校生総数2万4千人余り（うち海外生3000人弱、マレーシア・フィリピン・タイ・インドネシア・日本・韓国・朝鮮・アメリカ・アルゼンチンなど29か国と香港・澳門・台湾地区を含む）。2002年、廈門市に新キャンパスを開設することが決まり、2004年より建設を開始、2005年9月から建築・土木・機械電気・材料の4学院移転開設と学生募集が始まっている。2010年までに1万5千人規模の新キャンパスが完成予定だという。

廈門市集美区に位置する華僑大学華文学院は、専門的に留学生への華文教育を行い、対外的な漢語教学を展開する重点部門である。華文学院の前身は、1953年に設立された集美華僑学生補習学校・集美中国語言文化学校であるが、海外での華文教育の発展による需要に対応するため、1997年華僑大学のもとに編入された。すでに華文教育において、世界30か国余りの国と地域の4万人弱の人材養成実績があり、漢語・対外漢語の2学部（本科4年，専科2年）、留学生漢語・専科、一般漢語クラス、国外生（大学入学前）予科教育、海外生短期漢語教育（夏季）などの華文教育を行っている。

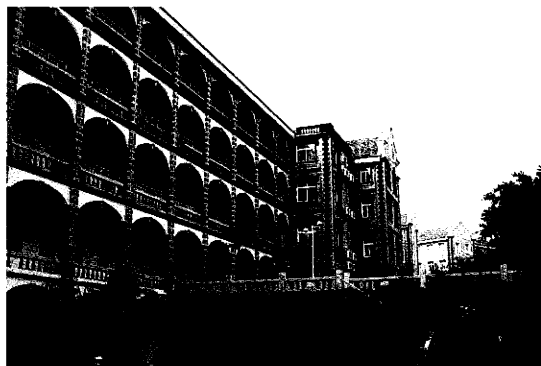


華文学院北門

## 「中国(福建)と長崎」：華僑大学・華文学院における中国語研修について



華文学院教室棟



華文学院教室棟

華文学院は、中国教育部（日本の文部科学省に相当）により外国人留学生募集資格を満たす学校として資格認定され、福建省内で唯一の漢語水平考試（HSK）試験会場となっている。現在、タイ・インドネシア・香港・澳門などに事務機構を設置し、アメリカでは中文学院を創立。2005年現在、中国国内の学生1100人（専科生・本科生を含む）、長期留学生540人（香港・澳門・台湾100人余り、フィリピン・インドネシア・タイ・カンボジア・ミャンマー・韓国・日本・欧州を含むその他20か国より外国人留学生400人余り）が在学し、短期クラスは各国から年間500人余りを受け入れているという。長期クラスには、各レベルの漢語クラスの設置だけでなく、選択科目として中国音楽・中国画・中華武術などの科目も開設され、学生に中国文化への興味を喚起させている。この学院には日本人学生が少ないので、学内に設置された留学生宿舎（二人部屋、ルームメイトは他国の学生）でも教室でも街でも、とにかく中国語を使わざるをえないという環境にある。

集美区には、同地出身のシンガポール華僑・陳

嘉庚（1874－1961）が創立した小学校・中学・高校・航海学院・財經学校など各種の学校が集中しており、「集美学村」「集美大学」と称される学園地区である。地区内限定の乗り合いタクシーが走り、ほどほどのメインストリートには銀行・郵便局・スーパー・チェーン店から飲食店・CD/DVD屋・学生相手の小さな店々が立ち並び、中国語実習の場に事欠かない。集美区の南側、華文学院正門の前面には海が広がり、大橋を渡れば経済特区の廈門島で、島内は港湾と旧市街、海外企業やスーパー・ショッピングモール・分譲マンションの産業区・新街区などに区分され、海産物と果物が豊富な亜熱帯海洋性気候の地である。

### 3. 夏季短期中国語研修—日程・クラス・参加者数について

#### (1) 泉州市・華僑大学本校（1994・1996）での研修

泉州市の華僑大学本校では、1994年夏と1996年夏に下記の日程で研修を実施した。

- ①1994年7月18日～8月8日（22日間）2週間の中国語集中授業と都市参観  
授業は、午前中50分×4回と午後夕食前に50

分×1回を、2週間の各6日間に配分。昼食後の休息をしっかりとって、午後は大学内外での実習活動、夜間は宿舎で自習と引率教員による補習。週末は泉州・廈門市内中心部と郊外地区の参観。集中授業修了後、上海など参観。

②1996年7月19日～8月9日（22日間）2週間の中国語集中授業と都市参観

授業は、午前中50分×4回を2週間各6日間に配分し、午後夕食前に50分×2回を第1週にのみ隔日で3日間配分。午後は大学内外での実習活動、夜間は宿舎で自習と引率教員による補習。週末は泉州・廈門市参観。集中授業修了後、上海など参観。

同校対外漢語教学部のもとに、第一中国語3年生対応クラス・第二中国語対応クラスの2クラスを設置し、前者には中国語による閲読と会話・質疑中心の授業、後者には中国語会話とヒアリング中心の授業を行った。両クラスとも教材内容は理解でき、教科としてのヒアリング・短文聞き取りには対応できても、教員からの中国語による説明や要求が聞き取れず、何を求められているのか判断できないため即座に反応しえないという状況に直面した。夜間に補習を行い、中国語による教室用語の聞き取りを練習し、授業中に理解できな



華文学院中庭



華文学院僑友之家（ゲストハウス）

った点についての質問を受けて解説を行い、中国語での質疑を指導した。両クラスとも複数の中国人教員が閲読・ヒアリング・会話を各々分担しており、各教員の要求内容も異なるため、引率者は各クラス・各教員の授業を一通り聴講し、中国人教員と日本人学生の間での調整機能を担当した。

授業や参観以外に、日中バスケット交流・餃子作り講習会なども行い、週末や課外の学内でのダンスや卓球・魚釣りなどの活動にも参加させていただいた。

(2) 華僑大学・華文学院（2000・2002・2004）での研修

廈門市の華文学院では、2000年・2002年・2004年の夏に下記の日程で研修を実施した。

③2000年7月28日～8月18日（22日間）2週間の中国語集中授業と都市参観

授業は、到着翌日午前中に50分×2回を行ったうえで、午前中50分×4回を2週間各5日間に配分し、午後夕食前の50分×2回を隔日で6日間配分。昼食後の休息をとったうえで、午後は大学内外での実習活動、夜間は宿舎で自習と引率教員による補習。週末は泉州・廈門市参観。集中授業修了後、上海・杭州市参観。

「中国(福建)と長崎」：華僑大学・華文学院における中国語研修について



華文学院僑友之家入口

④2002年8月10日～8月31日(22日間) 2週間の中国語集中授業と都市参観

授業は、午前中50分×4回を第1・2週各5日間・第3週2日間に配分し、午後夕食前の50分×2回を第1・2週の3日間に配分。午後は大学内外での実習活動、夜間は宿舎で自習と引率教員による補習。週末は泉州・廈門市・永定土楼参観。集中授業修了後、上海・蘇州市参観。

⑤2004年8月16日～9月6日(22日間) 2週間半の中国語集中授業と都市参観

授業は、午前中50分×4回を第1・2週の日と5日間及び第3週3日間に配分し、午後夕食前の50分×2回を第1・2週の日間に配分。午後は大学内外での実習活動、夜間は宿舎で自習

と引率教員による補習。週末は泉州・廈門市参観。集中授業修了後、上海・蘇州市参観。

引率者による事前研修と教室用語の聞き取り対応練習を90分×3回行ったうえで、語学研修に出発した。華文学院での研修は、2年生参加者が多数であったため、2年生対応クラスに3年生も参加して、1クラス設置。授業担当教員と学生間の調整、及び学生の聞き取りと応答レベル確認のため、引率者も授業に参加。1クラス設置のため、担当教員との連携も個々の学生の状況把握もし易く、夜間補習も各学生からの質問を受けながら、必要な学生へのケアに集中できた。回を重ねるにつれて参加者から長期留学者が増えている。

以下に示すのは、華僑大学本校と華文学院で実施した語学研修参加者数の一覧である。備考に記したのは、短期研修参加者のうち、3年生修了後に長期留学をした人数(割合)である。

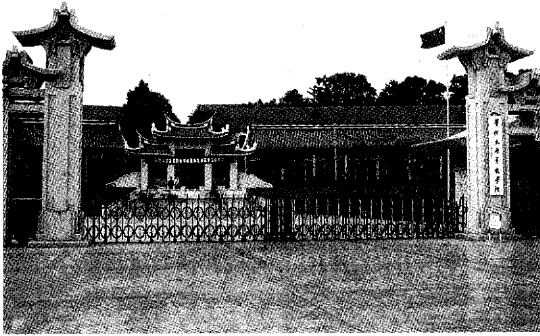
#### 4. 華文学院における夏季語学研修プログラムについて

##### (1) テキスト依拠からテキスト応用へ

華文学院(2002年夏)では、会話教材を使用

表1 華僑大学・華文学院 中国語語学研修参加者数一覧 2005. 12. 31. 現在

華僑大学参加者数							
	2年	3年	4年	男	女	計	備考(長期留学者数)
1994	9	9	1	9	10	19	1(5.3%)
1996	2	10	0	6	6	12	2(16.7%)
小計	11	19	1	15	16	31	3
華文学院参加者数							
	2年	3年	4年	男	女	計	備考(同上)
2000	7	1	0	4	4	8	2(25%)
2002	13	0	0	4	9	13	3(23%)
2004	5	2	0	2	5	7	3(43%)
小計	25	3	0	10	18	28	8
総計	36	22	1	25	34	59	11

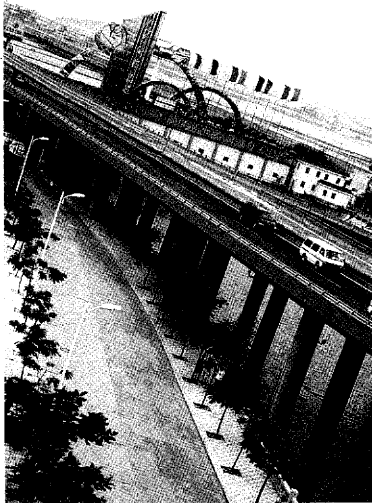


華文学院正門

し、3人の中国人教員が1回につき1課分の進度で授業を担当した。1人はテキストに依拠して発音トレーニングと練習問題に対応する授業、1人はテキストに準拠して場面を設定し表現を中心とする授業、もう1人はテキストを応用して話題を提供し中国語での聞き取りと質疑応答を行なう授業。受講者のレベルに応じ難易度の調整が可能である。

### (2) 教室用語の理解と対応—聞き取り確認

事前研修で教室用語の聞き取りを準備して、テキスト依拠型の授業には対処できていた。また準



集美より廈門経済特区への道路

拠型の授業は、出された課題に思いがけない表現や活発な反応続出の時間だった。中国語での細かい説明や課題提出要求や質疑が飛び交うテキスト応用型の授業は、要求事項のポイント確認と概要・背景説明など、引率者による夜間補習の実施と学生からの質問への対応が必要である。しかし、この応用型の授業は、学生の興味と意欲を引き出し、更なる向上への努力を促すものであった。

### (3) 交流プログラム・文化講座の充実—引率者・担当者共同

華文学院では、授業時間以外に午後の時間を利用して、学生の興味に合わせて下記のような学生交流や文化講座を行った。これらの交流や文化講座は、意思の疎通と内容理解が大事な要素となるので、日中の教員が共同・連携して準備・実施にあたった。

日中学生交流 (2000)

日中卓球交流 (2002)

剪纸(切り絵)文化講座と剪纸実習体験 (2002)

茶文化講座と茶館での茶文化体験

(2000・2002・2004)

食文化講座と餐館での食文化体験

(2000・2002・2004)



集美地区南の海沿いに



食堂での昼食

廈門経済特区概況講座と市内参観  
(2000・2002・2004)



食堂での夕食

#### (4) 食事タイムでの健康確認と予定・連絡事項の伝達確認—引率者

華文学院での食事は、夏の暑い時期なので特に衛生面に気を配り、基本的に学院の食堂で研修クラス用の食事を用意していただいた。食事の世話をする食堂の担当者が、学生と年齢が近い他省出身者なので、飲み物や料理についての感想や注文を中国語でやりとりする場になる。朝食の場で全員の健康と一日のスケジュール確認を行い、昼食後はゆっくり休息と昼寝をしてから実習活動をしていた。緊張した1週間目が過ぎると、2週間目には周囲での買い物にも、食堂や宿舎のフロア係りの若い人たちとのやりとりにも慣れ、あちこちで話がはずむようになる。

### 5. 短期研修から長期留学へ

次頁に示すのは、ここ10数年間の本学から中国の大学への長期留学者数一覧である。華僑大学・華文学院への長期留学者数、及びその他の大学への長期留学者数を示している。

〔表1〕〔表2〕から見て、短期研修については女子学生の参加数が男子学生を上回っているが、長期留学になると男子学生がほとんどを占めている。女子学生には早く卒業したい・させたいという要望が強いようである。そのためか、逆に海外での語学力の向上・実践体験を求めて、短期研修への参加意欲が高いようである。また男子学生は、将来の就職活動を視野に入れ留学経験を積み、日系香港企業に就職したり、国際物流関連企業、中国に支社や営業所をもつメーカーや食品関連企業などに就職している。

### 6. 終わりに—中国・東南アジア理解と交流の懸け橋として

華僑大学・華文学院は、海外華僑・華人の子女への中国語・中国文化教育機関として発足し、香港・澳門・東南アジア各国からの留学生に加えて中国国内の学生を多数受け入れている。東南アジア各国との歴史的・地理的・人的つながりに加えて、近年ではFTA(自由貿易協定)締結によって、また中国からの海外旅行・団体ツアーの対象地域として、相互交流・往来がさらに盛んになっている。華文学院へのASEAN各国・地域からの留学

表2 長期留学者数一覧

	華僑大学		華文学院		小計	その他		総計
	男	女	男	女		男	女	
1994						1		1
1995						1		1
1996								
1997						1	1	2
1998	1	0			1	2	1	4
1999	2	0			2			2
2000	1	0			1		1	2
2001						1		1
2002			2	0	2	1	1	4
2003			2	0	2	1	0	3
2004	2	0	1	1	4	2	0	6
2005			1	0	1			1
2006			2	1	3			3
小計	6	0	8	2	16	10	4	30
総計	16					14		30

生の急増ぶりは、そのような東南アジアの状況を反映しているのであろう。華文学院では、中国語を学ぶことによって、中国本土のみならず東南アジア各国の人々とも交流ができ、それぞれの国や地域の状況についての理解を深めることができる。

アジアに位置する日本、特に長崎は、中国・東南アジアと古くから海上交通・交易をとおしてつながっていた。長崎県と友好関係にある福建省、佐世保市の友好都市である廈門（アモイ）市、そして泉州市・廈門市に位置する華僑大学は、長崎県立大学と友好交流関係にあり、若干名の長期留學生を相互に受け入れている。先の表に示したとおり、本学では30名の長期留學生のうち華僑大学・華文学院への留学が16名をしめており、華僑大学・華文学院での短期語学研修参加者59名の中から、長期留學生11名を出している。華文学院での短期語学研修を経て同学院に留学した学生の中には、一年間で漢語水平考試（HSK）7級に達し奨学金まで獲得した学生がおり、文化祭

や歌の授業など楽しい留学だったという。なお華僑大学からの留學生も本学大学院に入学しており、両大学による共同研究・学術シンポジウムも継続して行われている。

今後とも、華僑大学・華文学院への語学研修と留学希望者が続き、長崎と福建という地域間のつながりが、日本と中国・東南アジアの相互理解と交流の架け橋となることを期待している。

なお、本稿は、華僑大学・華文学院での中国語研修の実施状況についてのまとめであるが、2005年12月下旬の華僑大学・華文学院への訪問・調査データを加えて執筆し、「中国（福建）と長崎」の地域間交流事例の一つとして提示する。本稿掲載写真は筆者撮影。人物写真は割愛した。

最後に華僑大学校長・呉承業先生、華文学院院長・金寧先生はじめ華僑大学本校及び華文学院で研修クラスを受け持って下さいました先生方、職員の方々に心から感謝の意を表します。

(2006.2.記)

参考：『華僑大学（1960-2005）』2005.10.  
http://.hwxy.hqu.edu.cn/